

三重大学 人文学部

法律経済学科

「協同組合論」

特殊
講義



豊内 和寿 / 日本労働者協同組合連合会センター事業団センター長

働く人の協同

第11回(12月19日): 受講46名(受講生40名・聴講&スタッフ6名)

労働者協同組合は、働く人々・市民が出資し民主的な経営、責任の分かち合い、人と地域に役立つ仕事をおこす協同組合である。仕事をしたい、働きたいというニーズがワーカーズコープの原点であり、自分たちで働く場所をつくり、人と地域に役立つ仕事を基本とする。労働者協同組合に関わる法律の制定が近づいており雇用や起業とは違う働き方の選択肢が生まれようとしている。

【講義の主なポイント】

- ・協同組合は、人々の自発的な組織であり自発的に手を結んだ人々が共同で所有し民主的に管理する事業体を通じて共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いをかなえることを目的としている。
- ・労働者協同組合は、働く人びと・市民がみんなで出資し民主的に経営し責任を分かち合って人と地域に役立つ仕事をおこす協同組合であり、協同労働は、働く人・利用者・市民が協同し「ともに生き、ともに働く」社会をつくる労働である。
- ・一般的な雇用労働では、資本は投資家、経営は経営者、労働は労働者と分かれている。協同労働は、労働も出資も経営も働く人が担うのである。
- ・ワーカーズコープの歴史は、失業対策事業の打ち切りが「事業団づくり」へと変わった。自分たちで働く場所をつくる。人と地域の役に立つ。事業に必要な資金は自分たちで出し合い働いて残す等が合言葉となった。
- ・介護保険制度開始に向けて、ヘルパー講座を開講し、地域の受講生と共に地域福祉事業所を開設し2004年までに100か所を超えた。
- ・指定管理者制度が始まり、「利用者との協同」「地域との協同」「働く者同士の協同」を掲げ、保育園や学童、児童館、高齢者施設、障がい者施設、コミュニティ施設等の管理運営を受任してきた。誰もが自分らしく働き、暮らし続けることができる地域をつくるため、地域若者サポートステーションや生活困窮者の自立支援、放課後等デイサービス等の事業をおこなっている。
- ・日本には、労働者協同組合を規定する法律がなく制定が求められる。そのために法制化をめざす市民会議や議員連盟が立ち上がった。この法律ができることで「企業に雇われる」「自分で起業する」とは別の働き方が生まれる。

第11回講義…受講生の感想レポート（一部抜粋）

Aさん（3年生）

失業者が街にあふれている状況で、国が失業対策事業として雇用の場を与えた。しかし、失業対策事業の打ち切りにより、自分たちの働く場の確保のため、自分たちでお金を出し合い、「ワーカーズコープ」が設立された。日本に今までこのような組織がなく、ヨーロッパの労働者協同組合も研究し、病院掃除や専らりをしていった。利用者の協同、地域との協同、働く者同士の協同の3つを掲げている。これからの課題として、「FEC自給コミュニティ」への挑戦と挙げている。天ぷら油と軽油にしたりと、まだまだこれら先にはなげ活死化していったという願望があるということも分かった。それぞれの地域でやりたこと、まだ話し合いの現状に初め組織であり、〇〇屋さんという訳ではない。労働者協同組合の法律が出来るとして、3人以上の人が集まれば、労働者協同組合として、「ワーカーズ」や「お花屋さん」が出来るということも分かった。高齢者や障がい者を雇用に大変では!?という問いに対して、正直、体的、精神的にフォローするにはいけないことがある。職員同士の変わらぬギスギスした関係がなくなるとして、団体全体で色々な人たちと一緒に働くという方針に向かって頑張っていることが分かった。

Bさん（2年生）

働くということは人の生活に深く関わっていることをワーカーズコープさんの歴史から改めて感じた。働くことに困難を抱える人たちの支援は、働く人自身に対する就労体験や就労訓練などはもちろん、障害がある子どもをもち親の支援につながる放課後デイサービスや学習支援など、「労働」を守るために「教育や福祉」などに関係する他分野のサービス（支援）に多く取り組んでいた。

また、後半の岡田さんの話で、高齢者や障がい者の方ばかり大変とくくるのではない。普通の人でも面倒臭い人はたくさんいる。と言っていてとても納得できた。高齢者や障がい者、普通の人と分けがけがちであるが、どれも互いに助け合える。障がい者が「お花屋さん」でフォローが必要なおともある。それらをすべて受け入れて団体全体で色々な人達と一緒に仲間として働くという前向きな方針がとても素敵だと思った。そして、その方針をすすめることで、地域社会の向上にもつながると思う。というのだった。

Cさん(2年生)

効率よく仕事ができる労働者を雇うというわけではなく、障がいを持つ人や高齢者でも働けるように仕事を提供するという取組がすばらしいと感じた。フォローが大変だから一緒に働くことができるとは考えずに、適切なフォローをすれば誰でも働けるという前向きな考え方は大切なことだと思う。働くことが他者より難しい人を排除する社会は悲しいので、そのような人たちと一緒に働けるように取り組んでいる労働者協同組合は私たちにとても必要に存在したと感じた。この組織のおかげで誰もが生きやすくなり、よりよい地域社会ができるということが分かった。また、働くことはただお金を稼ぐことではなく、人々のつながりもできるということも学んだ。

Dさん(2年生)

“誰も雇ってくれないなら自分たちの働く場は自分たちで作る”
という考え方は自分の中では衝撃的なものでした。
「働きたい」ということそのものが働く者の根本的なニーズであるということは、忘れがちなことかと思った。ニーズとは何という問いに対し、賃金とか労働環境とかいうところが先に浮かんでしまうので、もっと根本的なところにも目を向けて考えなければならぬと感じました。

Eさん(2年生)

経営者になるとどうしても利益第一で考えてしまうと思うのですが、労働者協同組合ではもちろん利益もありますがそれよりももっと別の目的をもって働いていることを感じました。
少子高齢化が進行する日本で労働者協同組合がおとなり保育園や高齢者施設などは必要不可欠だと思うし、「地域に必要な仕事は地域住民自身が担う」という考えは重要だと思いました。また労働者人口が減少する中で、子どもから高齢者まで、障害の有無関係なく全員が自分らしく働き、暮らし続けることができる地域社会づくりは日本経済を維持するために本当に大切なことだと考えました。

Fさん(4年生)

ワーカースコープは特定の分野にしかとるのではなく、様々な分野に力を入れている。それによって市民生活が保たれていると感じた。これは「大企業」ではなく地域密着の中小企業や組合が必要とされているように思う。

障害者や高齢者、このようにして見放さず、サービスを提供したり生活を支えたり、「生活を送る」ことに非常に重きを置いている。

Gさん(4年生)

本日の講義で労働者協同組合について抱いた印象として、特に生活困窮者や障がい者といった、普通に生活することが難しい人たちの就職や生活に寄り添うという側面が強いのかなという印象を受けました。世の中には、きつい困難を抱える人たちの支援を目的とする団体はたくさんあると思いますが、労働者協同組合は「共に働く」「自分らしく働く」といった精神を大切にしているのが素晴らしいと感じました。社会的に弱者と呼ばれる人々をただ支援するだけでなく、一緒に働き、地域のため、利用者のために仕事を進め、仕事に取り組むというのが、特にこれからの高齢化社会において重要な考え方だと思います。

Hさん(4年生)

ワーカースコープを今日初めて知り、お話を聞いた。初めは、労働に関する活動をされているのかと思いきや、主要事業は街の清掃や高齢者、障害者福祉、子育て支援と幅広く、「マジ」とは異なったお仕事内容だった。また、ごみから油などを店から回収して「燃料」として活用するほど、新たな事業も取り組んでおり、可能性に溢れる事業だと感じた。法制化されたら、「みんなが集まって仕事をする」という新しい選択肢が増えるのかもしれない。